年間第３２主日

第一朗読　列王記上 17・10-16
第二朗読　ヘブライ 9・24-28
福音朗読　マルコ 12・38-44

2024.11.10　9：30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭　高木健次神父

ごミサのたびごとに、わたしたちは日曜日は聖書から３箇所、部分的に読みますけれども、聖書っていうのは新約聖書――新しい時代、あとの時代に書かれたもの――であっても大体もう 2000 年ぐらい前ですね。旧約聖書に至ってはもっと、2500 年前とか――日本では弥生時代なのかな――とにかく昔なんです。ですから、その聖書に書かれていることを文字通り、わたしたちが現代のいろんな本を読むのと同じように読んでいると、その意味が曲がってしまうと言いましょうか、解釈――その意味は何か、言いたいことは何かっていうのをよくよく吟味する必要があるわけです。

今日の第一朗読では、預言者が、もう本当に食べる物が底をついているやめの家に行って、自分のために食べ物を作るように求める。でもその言う通りにすると、食べ物が実は尽きることがないっていう不思議な出来事が語られていました。乏しい物を預言者に渡したならば、それによってもう食べ物がなくなってしまうのではなくて、その瓶の油も小麦もどんどんどんどん出てきたっていう昔話みたいなというか、昔話ですけども、出てくるわけです。

で、それが現代でもこのようなことが起こるんだっていうような意味で捉えてしまうと、「わたしは神様のもとからやって来ました」っていう人に「あなたの財産をわたしに預けなさい。そうしたらあとで神様があなたに報いてくださるんだから。百倍にして返って来るんだから」みたいな、いわゆる投資詐欺と言いましょうか、そういうようなことを神様の名前でする人に引っかかってしまうわけです。

でも、ここで預言者が「生きられるようにする」っていうのは「神様の言葉を保つ」っていう意味です。そして、聖書の中での神様の言葉とは、「人間が生きられるのは、互に助け合うことを通してなんだ」と。そして神様がともに歩んでいるかどうかというのは、社会の中で一番弱い者たち――旧約聖書においては孤児とやもめと寄留者（外国から来て滞在している者たち）、それが旧約聖書においての一番弱い立場の人たちとされてます――その人たちがちゃんと生きら

れるかどうかということが、人々が神様とともに歩んでいるかどうかの指針なんだと、繰り返し出てくるわけです。

異邦人――その神様の御言葉が及んでいない人たち――は、それぞれが自分だけで個々に、いわゆる自己責任というか、で生活していかなければならないから、助け合いがないので、わずかな物しか持っていない者はそれが尽きたら死んでしまう。

しかし、神様の御言葉が及ぶ社会というのは助け合うから、瓶の油が尽きることがない。というのは、自分が乏しくてもその助け合いの中で弱い立場の者も生きることができるようになるんだ、そういうことを象徴的なエピソードとして語っているというふうに理解すべきだと思います。

だから、神様を信じていれば奇跡が起こって自分が豊かにされるみたいなことだけを追い求めていくと、そこに落とし穴と言いましょうか、そういうことを利用する悪い人に引っかかっちゃうということになるわけです。

今日の福音では、イエス様が神殿で様子を見ておられたというエピソードが出てくるわけですけど、その神殿こそイスラエルの民にとって神様の御言葉、何が大切なのかをいつも思い出すための、そういう一つの象徴的なあの場所であり、またそこで行われる祭儀というのはその祭儀そのものが目的というよりは、自分たちの上に神様がいるんだと、そしてその神様の示してくださった生き方をいつも保つっていうことを思い起こすための非日常的な場であるというはずなんだと。神様の御言葉とは何かと言えば、旧約聖書以来それは変わってないわけなんです。人間は互いに助け合わなければならない。あるいは助け合うならば、そこに幸せになれるんだと。

しかし、イエス様が言ってるのは、その当時の神殿そして神殿につながる信仰生活が、世の中で権威の源というか、強い人たちが自分がもっと重んじられていくための一つの道具になってしまっている。人間には序列があるんだっていうことを、この神殿での祭儀を通して印象付けるような、そういうものになっている。その一方で、「生活費」って訳されてますけれども元々のギリシャ語は「命」、命を全部渡した、つまり神様以外に最後かけるものがない、そういう弱い人がいるのに、そのことを忘れて、自分がどういうふうに他(た)の人から尊敬されているだろうかとか、重んじられるかとか、そういうことを気にする人たちに神殿そのものが歪められてしまっている。そういうものはやがてなくなっていく。何故なら神様の思いを保つ施設ではなくなっているから、っていうことをイエス様はマルコの福音書の中では言っていくわけです。それがために、祭司長たちから排斥されていく。でもそうであってもイエス様は言わずにはいられない。何故ならばそれが神様のみこころだから。互いに助け合うっていうこと、それが一番大事なんだということを思い出すための場所が神殿なのに、そうじゃなくて、誰が上か、

あるいはそれを通して、他(ほか)の人とは違って重んじられるためにはどうしたらいいか、みたいなことになってしまっていたら、もう意味がなくなってしまう。

だから今日の福音では、どんな人でも、お金持ちも貧しい人もそれぞれに応じて精一杯献金しましょうという話ではないわけです。それだったら大祭司たちはイエス様の言うことに大賛成、そうやって神殿を保っていくことが大事なんだっていう話。

でもそうではない。神殿を保つということの意味は何か。それは、神様がずっとイスラエルの民とともに歩むことを通して教えてくれた。大切なことは助け合うこと、そして助け合いが実現してるかどうか、弱い立場の人が生きられているかどうか、それだけなんだということを、それが神とともに歩んでいるかどうかの基準はそれだけなんだということを思い起こす。それが神殿のはずなんだっていう、そういう問いかけです、イエス様がおっしゃりたいのは。

それは、そのイエス様の時代の昔だけではなくて、わたしたちがこのように集まっている教会そのものについても、あるいは自分たちの信仰生活も問い直す必要があると言わなければなりません。わたしたちはイエス様、キリストの体の見える印であるっていうふうに教会を、自分たちを信じている。それは、一人ひとりが助け合いの精神を生きる、また教会全体を通して世界の中でそういう価値観が失われないようにいつもしるしとなり続ける、そういうために自分たちはイエス様から呼ばれたんだ、ということを思い出すのが教会という目に見える一つのしるしであり、またわたしたちがそのためにいつも心の中にイエス様を絶えずもう一回お迎えし直し続ける、忘れてしまうならば絶えずお迎えし続ける、そしてそのためだったらイエス様はいつでもわたしたちとともにいて助けてくださるんだっていう希望を新たにするのがミサであるということなんだと思います。

わたしたちがそれぞれの中で、教会全体としてもまた一人ひとりの生き方としても、本当に困難にある人たちに心を向けているかどうか、そうでなければどうかイエス様を思い起こさせてくださいというふうな思いの中で主とともに歩む、信仰に呼ばれた者としての歩みを改めて絶えず、いつもやり直し続ける者でありますように、導きと、そしてその導きに従う、神様の、イエス様の呼びかけに耳を傾ける本当の意味での謙遜な心を願いながら、このごミサを通して互いに、そして特に今助けを必要としている人のために祈り合いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC　http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi

携帯　http://www.koenji-catholic.jp/mobile/